

フレンド

フジキサエ

◆序

ほこりっぽい畳の部屋にこどもがふたりいた。
ひとは寝転がって。
もうひとはそれを見つめて。
横になったこどもは動かない。
紫色にはれ上がったまぶた。
切れた唇。
腕には無数の焦げあと。
手当てもされずに放置されている。
傍らにいるこどもが手を伸ばした。
おずおずと傷に触れようとして、ためらう。
何度も宙をさまよった手が、ふいに畳の上に落ちた。
ぽろぽろとこどもは涙をこぼした。
落ちるしずくが、畳に丸いシミをつくっていく。

「おにいちゃん」

小さな唇がかたわれを呼ぶ。
お母さんに見付かったら、しかられてしまうから。
この狭い部屋の壁にだって届かないくらい弱々しい声で。
呼ぶ。
何度も。
くりかえし。
ほこりが窓から差し込む陽射しに当たってキラキラと光っていた。
転がっていたこどもが目を開けた。
まぶたの上がたんこぶになっているので、薄くしか開けなかったが、それでもなんとか眼球を動かして、弟の姿をとらえる。

にこっと笑った。

実際は口元が少し揺れただけだったが、弟は分かっただろう。
さきほどより多くの涙をこぼして、名前を呼んだ。
やけどでふくれた腕をなんとか持ち上げる。
途中までしか上がらなかったが、弟はその手をつかんで頬に当てた。
かさかさの唇がなにかをつむぐ。
うん、と弟がうなずいた。
もう一度、言う。
泣きながら弟も頷く。
それを見て安心したのか、兄は水の中に沈んでいくように眠りに落ちていった。
部屋に静寂が訪れた。
弟はもう泣いていない。
兄の名前も呼んでいない。
ぬれた頬をそのままに座っていた。
時間が砂のようにおちていく。

突然、玄関のドアが開く大きな音がした。
びくりとこどもは身体をふるわせた。
手を握りしめて、全身の感覚で様子をうかがう。
母親が怒鳴っているのが聞こえた。
かたかたと奥歯が鳴る。

「お兄ちゃん！」

不安にたえきれず、こどもは兄を呼んだ。
返事はない。

「お兄ちゃん！」

揺り起こそうとしたが、兄の意識が浮上してくる気配は無かった。
どかどかと何人もの人間が上がりこんでくる音がした。
弟は何度も兄を呼び続けた。
泣きながら。
狂ったように。
ふすまが開いた。
弟は声もなく、かたまった。
おそるおそるふりかえり。
そして――。

珍しく夜凧（やなぎ）は目覚し時計より先に起きた。

耳を澄ますと、波の音が聞こえてくる。

この島では、あたりまえの音だが、いつ聞いても飽きない。

ベッドの上に身体を起こせば、やけに息苦しい。

潮くさい空気が部屋を満たしている。冬のうちはそうでもないのだが、春になると陽射しのせいで臭いがきつくなるのだ。

無意識のうちに夜凧は左耳に指を這わせていた。銀のカフスの冷たさに、少しだけ息が楽になった。

この部屋はワンルームの割に広い。ベッドとテーブルを置いても、まだ歩き回る余裕がある。

いつもと同じく、夜凧は制服に着替えるついでに、冷蔵庫から清涼飲料水を取り出して、コップに注いだ。

透明な液体が缶からコップに移ってゆく、このやわらかな流線が好きだった。喉の渇きが刺激され、いっきに注いだ分を飲み干してしまう。

制服のジャケットをはおり、片手には半分以上中身の残った缶を持って、夜凧は部屋を出た。

廊下を真っ直ぐ横切って、向かいの家のドアを呼び鈴なしで引き開ける。

遠慮なく部屋まで上がり、ベッドの傍らまで歩いていった夜凧は、そこに横たわる少年を見下ろして、息を吐いた。

「真朝（まあさ）、起きろよ」

「.....あつごふん...」

「今日はセレモニーだろ。遅刻する気か」

枕に顔を押し付けたまま真朝は、あー、だか、うー、だか言葉にならない声をあげる。

夜凧はそんな真朝を見下ろしたまま腕だけ動かして、彼の首筋に清涼飲料水の缶を押し付けた。

鋭い悲鳴をあげて飛び起きた真朝に夜凧は、「はい。おはよう」と、何もなかったかのように告げた。

しびしび洗面台へ行く真朝を横目に、夜凧はキッチンシンクにもたれかかって、清涼飲料水に口をつける。

几帳面な夜凧の部屋と違い、真朝の部屋はいつも物が散乱している。CDだとか服だとか本だとか。

これで本人がどこに何があるか把握していればいいのだが、たいてい真朝は置いた場所を忘れるので、探し回るはめになる。

そういうときは必ず夜凧が探し物を見つけ出した。真朝の行動パターンを熟知しているので、最後に見かけた場所を聞けば大体の位置が特定出来るのだ。

（そろそろ掃除させなきゃな.....）

今週の日曜日にでもやらせるか、と考えていると、不意に波をかくモーター音が聞こえてきた。

夜凧は窓へ寄って、少しだけカーテンを開けた。海は朝日を弾いてキラキラと光っている。目を細めると、小型の船が一艘、島へ入っていくのが見えた。

夜凧や真朝が暮らすこの島は島全体が、マリアンという被虐待児の養護施設になっている。兎

童の住む集合住宅と小中学校、乳児院があり、毎年千人前後のこどもがやってくる。陸から遠く離れているため、物資補給の船が週に三回やってくるが、それ以外は外との交流はない。

「何か面白いもんでもあった？」

顔を洗ってきた真朝が、制服のワイシャツに腕を通しながら、夜凧の肩越しに窓を覗き込んだ。

「なんだ。政府のオヤクニンじゃん」

「ようやく週三で来れるようになったみたいだな」

夜凧のあざけりを含んだ声に、真朝もにやりと笑った。

「冬の間は海が荒れてるからって、週に一回しか来ない時もあったよな」

「二週間に一回の時なんて、缶詰暮らしだったしな」

「ああ。あれもう勘弁。二度とごめん」

真朝がジャケットを着ながら顔をしかめると、夜凧は笑ってカーテンを閉じ、玄関へ足を向けた。

集合住宅は十階建てで、一階には乳児院、二階には事務室があり、小中学校のある学校棟や集会などに使われるホールへの渡り廊下にもつながっている。

三階から六階は十二歳以下の児童の居住区で、七階から十階は十三歳以上の児童の部屋になっている。

マリアンでは十三歳になるとバス・トイレ付きのワンルームが一人に一つ与えられるが、十二歳までは大部屋に五、六人で共同生活だ。風呂も便所も共同だし、食事も食堂だ。ただし一部屋にマザーと呼ばれる職員がつくので、掃除や洗濯の心配はいらない。

「いってきます、マザー」

「マザー、またね」

階段を降りていた夜凧と真朝の前を、こどもたちが駆けていった。

元気よく階段を下りていく彼らを目で追いながら、真朝が小さく笑った。

「なんかおかしいよな。あの中にいた時はここを出て行くなんてこれっぽっちも考えてなかったのに。今じゃセレモニーだぜ」

マリアンでは十五歳になる年に、保護された当時の記録を渡され、今後どうするか自身の手に委ねられる。親元へ戻ってもいい。就職してもいい。けれど絶対にマリアンからは出て行かなくてはならない。

「夜凧、まだ悩んでんの？ これからどうするか」

「少しだけな」

「夜凧はさ、親に金を出させた イコール 親に庇護されてるって思うから複雑なんだよ」

「庇護されてもいいって思うくらいの奴なら喜んで援助を頼むさ。でも人間として許せない奴なら一生縁を切る」

「夜凧は頭がいいからさ、イトコの私立でもトップで入れるだろ。そうしたら奨学生だ。学校選べば、全額免除だって夢じゃないぜ」

真朝は笑って、夜凧を振り返った。

「オレはダメだな。きっと親元だ」

夜凧はぴたりと足を止めて、柳眉を寄せた。

「真朝……進学はするんだろ」

「場合によったら就職かもよ」

はぐらかす真朝を軽く睨んで、夜凧はふいと視線を外した。

「急ごう」

真朝の横をすり抜けて、夜凧は階段を駆け下りた。そのままホールに着くまで、会話はなかった。

入り口で出席確認をして、ホールに入る。すり鉢上の造りなので、入り口からだ全体が見渡せる。見たことある顔ぶれがほとんど揃っていた。

「みんな早起きじゃん。いつもなら遅刻ぎりぎりのくせに」

「そりゃセレモニーだからな」

二人とも職員の指示に従い、クラスごとの席に名簿順で座った。真朝と夜凧は隣同士だ。

正面の壁に貼り付けられた巨大な液晶ディスプレイ、演台にもなるセラミックの机。講演会で何度も来ているはずなのに、今日は目に映る全てが特別なものに見えた。

真朝は早速クラスの違う友人のところへ行き、何か話している。夜凧は足を組んで、その様子を眺めていた。小突きあったり、大笑いしたり、間抜け面したり。本当に真朝は見ていて飽きない。

(場合によったら就職かもよ)

ふと先程の会話がよぎり、夜凧の顔が曇った。

真朝と夜凧はずっと一緒にいた。今は違う部屋だが、小さい頃は同じ大部屋で暮らしていた。クラスも同じだ。それはマリアンが勝手に決めた事だったが、夜凧にとって真朝は、名ばかりの両親よりも遥かに近い存在だった。離れるなんて考えられない。

けれど実際十五歳を過ぎたらマリアンには居られない。必然的に離れて暮らすようになる。お互いの生活が出来て、忙しくなって、次第に連絡も取りにくくなったら――。

「なに難しい顔してんだよ」

いつの間に戻ったのか真朝が、横から顔をのぞきこんでいた。夜凧が顔を上げると、みんなそれぞれの席に着き始めていた。

「そろそろ始まるぞ」

真朝のささやきに重なって、開始のブザーが鳴った。

セラミックの机についていた一人の女性が立ち上がり、液晶ディスプレイに顔が大写しにされる。四十代後半の小柄な婦人だが、見えない威圧感がある。さすがこのマリアンの施設長と言った所か。

「おはようございます、みなさん。昨日は良く眠れましたか。興奮して寝られなかった人もいるのではないのでしょうか」

微かにこどもたちがざわめいた。熟睡だよ、とか、俺も、とか、実は寝不足、とか。囁き声がホールの天井から跳ね返り、小さな波になる。

施設長はこどもたちの話し声に眉一つ動かさずに話を進める。

「知っての通り、みなさんには苗字がありません。これはみなさんが誰のものでもない、という証です。けれどこれから社会の一員になるために、みなさんは縛られなくてはなりません。このあと、それぞれの記録が配られます。それには苗字と共に、過去が載っています。全てみなさんを縛る物です。けれど、進路を決めるためには、きっと役に立ってくれるでしょう」

一息ついて、施設長はホールをぐるりと見回した。

「みなさん幸せになってください」

ゆっくりと施設長がお辞儀をすると、パラパラと拍手が起こった。

施設長が席に着くと、ショートカットの若い女性が立ち上がった。

「それでは記録の受け渡しに入ります。記録はCD-ROMになっており、配布は担任の先生が行います。受け取り次第、自由解散とします」

さっきとはまた別のざわめきがこどもたちの間に起こる。夜凧と真朝の担任は端の席に座っていたのだが、待ってました、とばかりに立ち上がり、脇に抱えた平べったいカゴから正方形の封筒を取り出し始めた。

「はい。真朝。夜凧」

一枚一枚、手で渡される。

夜凧は受け取ると、すぐに封を開けてみた。

CD-ROMの表は緑色のコーティングがしてあり、金色の文字で名前と生年月日と、もうひとつ別の日付と九桁の数字が記してあった。きっとこのCD-ROMが作成された日と認識番号だろう。夜凧はCD-ROMを元に戻して、きっちり封筒の口を折り曲げた。

顔を上げると、隣の真朝は封筒をひっくり返して、裏表を何度も見ている。夜凧がいぶかしげに見ていると、不意に真朝が横を向いた。

「夜凧、これからなんかある？」

「今日はまだ終わりだから、家に帰るだけだろ」

「じゃあさ昼飯一緒に食おうぜ。オレ作るから、場所は夜凧の家な。決定」

「は？」

「楽しみにしてるよ」

言うが早いか真朝は立ち上がり、ホールから出て行ってしまった。追いかける理由もなく、夜凧はその背中を見送って、小さく息を吐いた。

家に帰ると、夜凧はすぐにパソコンをたちあげた。一人に一台支給されているもので、A5サイズだが処理は早い。スロットにCD-ROMを入れると、自動的にファイルが開いた。ウィンドウが画面いっぱい広がる。

「……え？」

てっきり生々しい虐待の跡を写した写真でも現れるかと思ったら、最初の画像は、一人でベランダに立って、楽しそうに笑っている、幼い夜凧の写真だった。瞬きをして、下のテキストに目を走らせる。姓名、生年月日、血液型、そして。

実兄・真朝。

一瞬、息をするのを忘れた。

(真朝が、俺の、兄貴——?)

信じられないまま画面をスクロールする。

現れた画像は、病院の診察用ベッドに寝かされているひとりのこどもの写真だった。

その小さな身体には数え切れないほどのあざが付き、タバコの火を押し付けられたと思われる火傷の跡も見られた。

右足が太もものあたりで不自然に曲がり、骨折しているのが分かる。

小刻みに手がふるえた。

その下のCain Abel syndromeと書かれた青い文字をクリックすると、画面の右側に新しいウィンドウが開き、説明が現れた。

Cain Abel syndrome【カインアベルシンドローム】二人以上の兄弟において、親が一人に集中して虐待をし、他の兄弟は普通の家族として接すること。特に二人兄弟の場合は子に対する態度が顕著に変わり、暴力をふるわれた方は最悪命を落とすこともある。

そこまで読んで、夜凧はパソコンを乱暴に閉じた。

トイレへ駆け込み、こみあげてくる不快感を吐き出す。

朝食を食べていないせいで、胃液しか出てこなかったが、それでも喉の奥に何かがつまっている感じがして、無性に気持ち悪かった。涙が溢れてくる。口の中で唾液と胃液がまざりあい、また吐いた。

「……うそだろお……」

トイレの壁に寄りかかり、夜凧はうなだれた。

タオルをたぐり寄せ、あごを伝う胃液をぬぐう。そのままタオルに顔を埋めた。

しばらく夜凧はくぐもった嗚咽をもらしていたが、次第にそれもなくなり、後はひたすらリノリウムの一点に目を落としていた。

涙の跡が乾いた頃、不意に玄関のドアが開く音がした。

(真朝だ)

反射的に外へ出ようとして、夜凧はハタと止まった。

夜凧の記録に兄のことが書いてあったということは、当然真朝のCD-ROMにも弟の——夜凧の——ことも書いてあったのではないだろうか。

足音はトイレの前を過ぎ、部屋へ入っていった。がさがさとビニール袋のこすれる音がする。きっと昼飯の材料でも買ってきたのだろう。

出ようか出まいか散々悩んだ末に、夜凧はゆっくりとトイレのドアを押し開けた。

ビニール袋から物を取り出してシンクに並べていた真朝が、夜凧に気付いて振り返った。

目が合った瞬間、心臓が止まるかと思った。

「どうしたんだよ、夜凧」

いつもと同じ屈託のない笑顔に、夜凧は目を瞬かせた。

「すげえ顔色悪いぞ。それにそのタオル。何で持ったまま出てきてんだよ」

「あ……これは……今、吐いて、汚したから……」

「マジ？平気かよ」

真朝は夜凧の額に手を当てると、熱はないよな、と呟いた。

その仕草があまりにも前と変わらなくて、夜凧は混乱した。

「……真朝」

どうして、と問う前に、真朝の方が机に置いてあるパソコンを目に留め、状況を察した様子で夜凧に向き直った。

「夜凧、見たんだ。CD-ROM」

「真朝は……見てないのか……？」

「焼却炉で燃やしてきた」

真朝は肩をすくめて見せた。

「なんで……」

「必要ないじゃん」

突っ立ったままの夜凧に笑いかけて、真朝はキッチンへ向き直る。

「過去とか親とか、そういうのなしで、オレは進路を決めたいんだよ」

正論なのだと思う。

けれど本当に実行できるのは強い人間だけなのだと感じる。

ふいに疲れが押し寄せてきて、夜凧はベッドに倒れこんだ。

(今は何も考えたくない)

昼飯はオムライスだぞ、という真朝の声に適当に答えて、夜凧はゆっくりとまぶたを閉じた。

暗闇の中で、こどもが泣いている。

ひざを抱えて、わんわんと声を上げている。

周りにはおもちゃが散乱しているけれど、どれにも興味を示さず、泣き続けている。

夜凧は眉をしかめながら、こどもに歩み寄った。

「どうしたんだよ」

こどもはしゃくりあげながら、闇の一点を示した。

「おっ……おっ、おにいちゃ……っが」

夜凧は何気なくこどもが指差したところを覗き込んだ。

「おにいちゃんが……おにいちゃんが」

何もいないように思えたそこに、ぼんやりと白いかたまりがあった。

まばたきをすると、黒い霧が晴れていくように、次第にその輪郭がくっきりしていく。

そして、その白いかたまりの正体が分かった瞬間、夜凧は息を呑んだ。

「おにいちゃんが しんじやった」

布団をはねのけて、夜凧は飛び起きた。

額に手の平をこすりつけて、大きく息を吐く。

まぶたの裏に、夢の残像がこびりついている。

闇に横たわっていたのは、幼い頃の真朝。身体中にあざがあり、唇は切れ、目の下は腫れ上がり、昨日見た写真そのものだった。

ぴくりとも動かないその姿は、まるで使い古されたおもちゃのようで。

「……………」

喉元まで何かがせりあがってくる感じがして、夜凧はパジャマの胸元をつかんだまま、のろのろとベッドから降りた。

清涼飲料水を飲む元気もなく、早々に制服に着替え、家を出る。

(行きたくない)

はじめて考える。真朝の所へ行くのが億劫だなんて。

ゆっくりとドアノブに手をかけて回す。真朝はドアに鍵をかけた試しがない。面倒くさいからと言うが、本当のところ鍵を作ったら三日でなくすことが目に見えているのだ。

三和土に足を踏み入れ、靴を脱ぎ、フローリングを一步一步進む。カーテン越しに差し込む光が、部屋をほのかに明るくしていた。

いつもなら平気で踏みつける雑誌や服を、ていねいに避けて、夜凧はベッドまで歩いていった。

枕を抱いて、真朝が幸せそうに寝ている。前はどうやって起こしていたんだっけ、と記憶をたぐり寄せながら、真朝の肩に手をかけた。

「真朝、起きろよ」

「……あとごふん……」

そのまま真朝は枕に顔を埋めてしまった。

さきほどより強く揺さぶろうとして、夢で見た真朝が脳裏をかすめた。

息がつまる。

ゆっくりと真朝の肩から手ははずし、夜凧は床に腰を下ろした。

チッ、チッ、と時計の音が部屋に響く。

見慣れたはずの真朝の顔を、ひどくしずかな気持ちで夜凧は見下ろしていた。

いつから仲良くなったのかは覚えていない。気付いたら夜凧の隣には真朝がいた。

理科でアサガオの種を植えたとき花の色は何色か賭けたり、

プールで学年ナンバーワンを決めるとき最後まで競い合ったり、

天体観測でどちらが遅くまで起きていられるかと勝負したとき一緒に寝てしまったり。

(真朝が殴られているとき俺はどうしていたのだろう)

あの写真のように笑って、親に甘えていたのだろうか。

(もし俺が真朝だったら)

拒まれた子と愛された子。

——CainハAbelヲドウシタツケ？

ぞっとした。

行き着いた結論があまりにも過酷で、現実的すぎた。否定する材料が見付からない。

「……………」

夜凧が呆然としていると、真朝が目を開けた。

焦点の定まらない瞳で瞬きして、夜凧に視線を合わす。

「いまナンジ？」

散乱した物の中から、アナログ時計を引き寄せて、はちじよんじゅうごふん、と告げると、真朝が飛び起きた。

「なんで起こしてくれなかったんだよ！」

洗面所へ駆け込み、あわただしく制服に着替える。

(そういえば学校あったんだっけ)

遠くのほうで考える。けれど身体が重くて、かったるい。

のろのろと立ち上がった夜凧の手を、真朝がつかんだ。

「走るぞ！」

急に引っ張られて倒れかけながら時計を床に置き、バタバタと真朝の部屋をあとにした。

始業ベルぎりぎり教室に滑り込み、寝防かよ、とひやかす声を聞きながら席につく。

十五分で集合住宅の二階まで駆け下りて、学校棟の十階までダッシュというのはかなりつらい。

心臓が痛いくらいに跳ねていた。血は忙しく身体中を巡っているというのに、頭だけ汚い血がよどんでいるようにズキズキと痛む。

夜凧はいつもよりおおざっぱな動作でノートと教科書を広げると、無意識のうちに銀のカフスに指を這わせていた。

一時間目の数学教師は次々と生徒をあて、宿題だった章末問題を黒板へやらせている。

「問い十二、夜凧」

こんなときに限ってついてない。さいわい宿題はやってある。

ノートを片手に立ち上がった夜凧は、ふと床が異常にやわらかいの気付いた。

頭を振って黒板まで行く。かたいフローリングの上を歩いているはずなのに、まるで砂浜のよ

うに手ごたえがない。

やばい、と思ったときは遅かった。

ひざの下から力が抜け、喧騒が遠ざかっていく。

めまいがする。身体が支えられない。ブラックアウトだ。

頬に床の冷たさを感じたと同時に真朝の声を聞いた気がした。

こどもの泣き声が聞こえる。

無防備でいて、助けられることを疑わない、それ。

深い闇に吸い込まれて、また生まれる。

けれどどこを探しても泣いているこどもはなく、ピクリとも動かないこどもがひとりで横たわっていた。

こどもの身体中には打撲傷があり、足が不自然に曲がっている。

ゆっくりとその目が開く。

腕だけで身体を起こし、真っ直ぐに見据えてくる。

血の滲んだ唇が動いた。

ヤ ナ ギ ナ ン カ シ ン ジ ャ エ

「——……っ！」

なにかをつかむように右手が宙をかいた。

開いた瞳に見知らぬ天井が映り、我に返る。

「あ……」

夢を見ていた。ひどく寝覚めの悪い幻影。まるで夜凧の不安をそのまま実体化したような。

手の平でひたいをぬぐい、夜凧はベッドの上に身体を起こした。

真っ白な天井に銀色のカーテンレール。クリーム色のカーテンがベッドを囲んでいる。

保健室なんて久しぶりだ。中学に上がってからは一度も来ていない。

カーテンの向こうでスリッパの音がし、隙間からふくよかな顔がのぞいた。

「お目覚め？」

白衣を着た小柄な女性がにっこり微笑む。

ひとなつつこい笑顔に、夜凧は少しだけ緊張をといた。

「すみません。お世話になったみたいで」

「寝不足から来る貧血ね。朝食は食べた？」

「……いいえ」

「一人で面倒くさいのは分かるけど、倒れるくらいなら食べなさい。食べたくないなら倒れるな。ワガママと責任は紙一重。これ常識。オッケー？」

顔に似合わない、毒のある言い方に夜凧は好感を持った。おもしろい人だ。

「まあ例年この時期になるとね、体調不良は続出するんだけど。君みたいな年頃の子は精神的なものが身体にくるからね。どうする、まだ寝る？」

夜凧が首を横に振ると、養護教諭は、そう、とうなずいてカーテンを開けた。

窓から差し込む鋭い光に、夜凧は思わず目を細めた。

保健室は学校棟の一階にあるので、ダイレクトに海面からの反射がくる。黒い残像がなくなるまでしばたいて、夜凧はベッドから降りた。

「悩み事があるなら遠慮なく来なさい。こころとからだのケアは専門だから」

温かい声に、笑顔でお辞儀をする。

保健室を出ようとして夜凧はふと手を止めた。

「ここまで誰が連れてきてくれたんですか」

ワーキングチェアに腰をおろしながら、養護教諭は、ああ、と呟いた。

「名前は聞かなかったのよね。後でまた来ますって言ってたから。真っ黒いツンツン頭の子。同じクラスじゃない？」

真朝だ。

(あいつが運んできてくれたんだ)

あの笑顔を思い出した瞬間、さっきの夢がフラッシュバックした。

激しい憎悪と拒絶。

あれはただの想像だろうか。

乾いた唇をなめて、夜凧は口を開いた。

「あの、Cain Abel syndromeってご存知ですか」

「この職員ですから」

養護教諭はゆっくりとした動作でうなずき、机にひじをついた。

「Cainは拒絶された子、Abelは寵愛された子。Cain Abel syndromeは肉体的だけでなく精神的な虐待でもあるの。暴力をふるわれた方も、それを見ているだけしか出来ない方もここに深い傷を負うわ」

「Cainは.....その.....Abelを憎んでいるのでしょうか」

「あの神話と同じだとは言えないわ。だけど違うとも言い切れない」

「そうですよね」

苦笑をはいて、夜凧は床に目を落とした。

「ありがとうございます。失礼し.....」

「それにCainが忘れてるって場合もあるからね」

夜凧の背を追うように、声がかけられた。弾かれたように振り返る。

「あなたはCD-ROMをもらうまで、過去の記憶をすべて覚えてはいなかったんじゃないかしら。小さな頃のことだし.....それにね虐待を受けたこどもは『記憶の瞬間冷凍』といって、辛い体験をフリーズさせて心の奥底に閉まっておくことがあるの。CainがAbelを覚えていないとしたら」

一旦区切って、養護教諭は安心させるように微笑んだ。

「ともだちにだってなれるわ」

瞬き一回。夜凧は養護教諭の目を見つめ、それから確かな笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

丁寧に頭を下げ、保健室の扉を閉めた。

ひっそりとしたエレベーターホールでエレベーターを待っていたら、頭上で授業終了のチャイムが鳴った。

保健室を出るとき、時計を確認しなかったので何時間目が終わったのか分からない。

とりあえず教室に戻るために、やってきたエレベーターに乗ろうとして、

「あ、真朝」

扉が開いたそこに真朝が立っていた。

思わぬ鉢合わせに向こうも目を丸くする。

「夜凧、もう平気なのか？」

開口一番がそれで思わず夜凧は笑ってしまった。

なぜかとてもくすぐったい。

「あたりまえだろ。充分寝させてもらったさ」

肩をすくめて、道を開ける。

真朝が降りると、エレベーターはすぐに扉を閉めてするすると昇って行ってしまった。

「ところで今何時だ。もしかして一日中寝てたのか」

「今は昼休みだよ。オレ、保健室でお前の様子見てから、購買行くつもりだったんだけど、お前どうする？」

「一緒に行くよ」

連れ立って購買へ入ると、さすがにまだ昼休みが始まったばかりなので空いていた。

マリアンで物が売っているのは学校棟の一階にある購買部だけだ。ここに来れば欲しいものはたいてい揃う。食べ物から文房具、殺虫剤から洋服まで。ないものでも注文しておけば次の船で持ってきてくれる。

「牛丼、焼きそばパン、コロケパン、カツサンド、ベーコンレタストマトサンド、牛乳パック……と。オッケーおばちゃん会計よろしく」

どさりと両手いっぱい抱えたものをレジに置いて、真朝はICカードを手渡した。

マリアン内では貨幣ではなく、ポイントで売買が行われる。生徒は毎月一律のポイントをもらうのだが、そこはそれ。大食漢の真朝と少食の夜凧とではあきらかに減りが違う。

「真朝よくそんなに食べれるな」

「夜凧こそ食べなさすぎ。なんでゼリーと水だけでもつんだよ。だから倒れたりすんだぜ」

「あれは朝から全力疾走したせいだろ」

「遅刻した方が良かったかよ」

「お前がもっと早く起きればあんなことにはならなかった」

「起こさないのが悪いんだろ」

「たまには一人で起きてみせろよな」

突き放した言い方に、真朝が沈黙する。

会話のないままエレベーターホールまでたどり着き、箱がおりてくるのを待っていると、真朝が、あ、と呟いた。

「そういえば、さっき担任が教室来て、夜凧が起きたら職員室来いって伝えろって」

「本当か？　じゃあちょっと行って来る」

つい一分前にケンカをしたとは思えないほど、くったくがない態度でふたりは別れた。

年月が作り出した繋がりもあるだろうが、相手がそれくらいで自分を嫌いにならないという安心感がお互いにあるからこそ為せる技だろう。

それに疑問なんて抱かなかった。

今までは。

真朝の姿が見えなくなってから、夜凧はホッと胸を撫で下ろした。

今は少しのいさかいでも怖い。嫌われるのではないかとビクビクする。

(兄弟だなんて言えない)

この関係を壊したら、引き換えに何が起こるか分からない。

それゆえに。

(なくすくらいなら、このままでいい)

きゅっと夜凧は手を握った。

職員室の入り口で声をかけると、昼飯の途中だったらしく弁当を広げたまま担任の吉永が夜凧を手招いた。

「あ、夜凧こっちこっち」

マリアンには女性職員が多く、吉永のような男性職員は珍しい。

吉永は若いけれど頼りがいがあり、さばさばした性格なので生徒の間では人気があった。

「もう大丈夫なのか」

「ええまあ」

「なんだ昼飯これだけか？ これじゃあまた倒れるぞ。ほら、これやるよ」

弁当の横に置かれていたアンパンを渡され、夜凧は苦笑まじりに受け取った。

言動が真朝にそっくりだ。

「他の奴には二十分休みで渡したんだが、お前いなかったからな」

進路希望調査、と書かれたプリントに夜凧は、ああ、と小さく呟いた。

「提出は来週までな。具体的に決まっていなかったらそう書いてくれていいから」

「分かりました」

失礼しました、とお辞儀をして職員室を後にする。

エレベーターが来るまで、夜凧は手元の紙に目を落としていた。

(進路……か)

——場合によったら就職かもよ。

昨日の真朝の言葉を思い出し、夜凧は息を吐いた。

できることなら真朝と同じ学校に進学したい。

だけど真朝が何を考えているのか、いまいち分からない。

(考えなければならぬが多すぎる)

ひとつためいきをつけて、夜凧はやってきたエレベーターに乗り込んだ。

◆要求

どんなに願ったところで時間は着実に消化され、陽射しの強さも変わる。

夜凧は頬杖をついたまま、おぼろにゆがむ水平線を眺めていた。

「恒例の球技大会ですがークラス対抗で一」

教室はエアコンディショナー完備で、人工的な風が湿度を一定に保っている。

ガラス一枚隔てて直射日光にさらされている外界が、まるでテレビジョンのようだ。

教室の中に目を戻す。ワッ、と喧騒が夜凧を包んだ。四十人がそれぞれにしゃべっている。

教卓で声を張り上げている委員長がかわいそうに見えた。

そのまま窓に目を戻そうとした夜凧の耳に、女子の声が飛び込んできた。

「私ね、今度の船で本土に行って、親に会って来るんだ」

思わず夜凧は振り返っていた。

窓際から二列目で、隣の席としゃべっている子がそうらしい。

「この前ね、弁護士さんを通して、コンタクトを取ってみたの。そうしたらお母さんが会いた
って言ってくれて。もう会う日も決めてあるの。あとは私が行くだけよ」

なにもなかったように夜凧は向き直り、密かに唇をかみしめた。

夜凧自信は親元へ戻らないと決めているため、そういう情報にうとかった。

けれど世間では着々と準備がはじまっているようだ。

(真朝はどうなんだろう)

面会するとか本土に渡るとかそういうたぐいの話は一切聞いていない。

けれどそれはただ夜凧に話していないだけで、実際はあの女子のように話が進んでいるのかも
知れない。

気付かないうちに、夜凧はカフスをいじくっていた。

(――オレはダメだな。きっと親元だ)

セレモニーの前に真朝が言ったあれはどういう意味だったのだろう。

虐待事件において恐れられていることは、親元に戻ったこどもがもう一度虐待されることだ。

だからマリアンでは十五歳のこどもが直接親に会わずに資金だけ提供させるように専属の弁護
士を通じて交渉する手段も用意している。

けれどあの真朝の言い方はそういう感じではなかった。

引き取られ、同じ屋根の下に住み、両親の庇護のもとに生活していくような物言いだった。

(渡したくない)

じわりと独占欲がにじんでいく。

それは親元に帰したらまた虐待されるのでは、という危惧ではなく、純粹に、自分の傍に置い
ておきたいという欲望からうまれたもので。

(どうしたら真朝を取られずに済むのだろう)

「夜凧」

ハッと顔を上げると、真朝が前の席に座っていた。どうやら席を交換したらしく、前の席の奴
は真朝の席に座って、周りとしゃべっている。

「なあ、夜凧はどれ出る？」

カフスから指をはずし、今までまともに見ていなかった黒板へ目をやる。

「そうだな。バレーは嫌いなんだよ、チームプレイがだめだと散々だし。サッカーは体力ないし

、ハンドボールもちょっと……。やっぱテニスかな」

「お前って本当に消去法なんだな」

笑いながら、真朝は手を上げた。

「はい、委員長一俺と夜凧、テニスねー」

「お前こそ自主性がないんじゃないか」

「夜凧と一緒に良いんだよ」

皮肉る夜凧に、真朝はくったくなく笑う。

このストレートな性格が真朝の魅力の一つだ。

そして夜凧が真朝から離れられない一因でもある。

ふとした瞬間に『特別』なのだと言外にこめられる心地よさは、一度はまったら脱げ出せない

。

(悪質な、依存だ)

麻薬のように。

(甘い誘惑に逆らえない)

がらりと教室の扉が開き、吉永の声が雑多なざわめきをかきませた。

ほとんど進まないままに学級会が終わる。

このあとに吉永が黒板を見て、なにやってんだお前ら、とか叫んで、選手登録をしていない人だけ残されて、夕方には決まっているのだろう。

そういうのが良い。

強制的な力で流されていく方がラクだ。

光の乱反射する海を見つめて、夜凧は息を吐いた。

「第一志望 合格率八十パーセント A判定」

ベッドに寝転がって、帰りのHRでもらった模試の結果を読み上げた。

この前の進路調査で『授業料全額免除、奨学金、寮付きで、それなりに学力のある学校ならどこでも』と書いて提出した夜凧に、吉永がすすめてきた私立校だ。

もちろん全額免除と奨学金は成績優秀者に限る、と注釈がついていたが、そんな夜凧には大した障害ではない。推薦一本で行くなら太鼓判押すぞ、と吉永に言われた。

「真朝はどこに行くだろうな」

語尾にインターホンが重なった。

ピンポンピンポンと連続して鳴らすのは真朝しかいない。

「よ、夜凧。夕飯まだだろ。一緒に食おうぜ」

玄関を開けると、両手に大きなビニール袋を四つも持った真朝が立っていた。

「お前よくそんなに買って、ポイント足りるな」

「食べるのは人間の幸せ。まあ明日から昼飯は夜凧のおごりだから平気」

「素直におごってください、って言えないのかよ。一文なし」

「だーかーら。本日のメニューは『放っておくと食事をパスしまくる夜凧のための真朝特製とうもろこしとなすの激辛カレー』にしたからさ」

うきうきとビニール袋から食材を取り出す真朝に、夜凧は、何がだからなんだ、と突っ込むのをあきらめた。

どうせポイントは余っている。

それに真朝のポイントが激減しているのは夜凧の分の夕飯も作っているからだ。

作るくらいなら食べない夜凧の食生活がまともなのはひとえに真朝のおかげだと夜凧自身も分かっている。

一か月分の昼飯代くらい安いものだ。

次々と並べられていく食材を眺めながら、夜凧はベッドの端に背を預けた。

野菜を切って鍋に放り込んで、いためて、水を入れて。真朝の動作はそつがない。

「で一っきた。ビバ自信作」

蚊取りブタや風鈴がのったままのテーブルに、熱いカレーライスの皿が二枚置かれる。

夜凧の腹がぐうと鳴った。

「いただきますあす」

勢いよく食べ始める真朝を見て、夜凧もスプーンを取る。

「あ。美味しい」

「だろ！？これさ香辛料がポイントで、この味を出すの難しいんだぜ」

BGM代わりにつけたラジオに耳を傾けつつ、とりとめもない話をする。

ごちそうさま、と手を合わせて、真朝はふたり分の食器を流しに持って行った。夜凧は洗い終わった食器を受け取り布巾で拭く。

夜凧はなるべくさりげない調子を装って、口を開いた。

「なあ、真朝」

「ん？」

「親ともう面会した？」

「.....まだ」

「戻るつもりなんだろ」

「そうなるかもね」

「高校はどこにするんだ」

「まだ決めてない」

「いいのかよ」

「吉永には呼び出しくらいまくってるけどな」

やっぱり要領を得ない。

(これじゃあ偶然同じ高校に行くなんて無理だな)

皿を拭きながら、夜凧は密かにためいきをついた。

ラジオのニュースはちょうど天気予報で、キャスターの女性がしゃべっていた。

「今日は七夕ですね。空にはたくさんの星が見えます。晴れているので織姫と彦星はぶじ会えたようです」

女子が好きそうな伝説だな、と夜凧は胸中で呟いた。

会うことを禁じられているからこそ燃え上がる心。

つくりものだから焦がれることができる。

これが現実になった場合、どれくらいの恋人たちがこわれなくていられるのだろうか。

(俺は無理だな)

あっさりと判断を下して、夜凧は拭いた食器を棚に戻した。

(傍にいないと不安になる)

四六時中べったりと張り付いているわけではない。ずっと思い続けているわけでもない。けれ

どふとした瞬間に横にいなければ、会いたいときにいなければ、その関係はすでにあってもなくても同じだと考える。

(真朝は俺がいなくても平気なのかな)

ちらりとすがめた目がもろに真朝の視線とぶつかり、夜凧は拭いていた食器を落としかけた。

「夜凧。屋上に行こう」

「はあ？」

「いいからいいから」

真朝はタオルで手を拭いて、夜凧の背中を押した。

追い立てるように連れて来られたのは、集合住宅の屋上で。

夜は立ち入り禁止なのだが、真朝はあっさりダイヤル式の鍵を開けてしまった。

平気平気とくり返す真朝の後から屋上に上がると、そこには満天の星空が広がっていた。

「うわ……」

「すげえだろ」

真朝は笑って、コンクリートの上に腰を下ろした。

湿った潮風は昼のものとは違い、肌にひやりとした冷たさを残す。

夜凧も真朝の隣に座って、漆黒の空を見上げた。

「七夕って実は雨の確率の方が高いんだぜ。織姫と彦星の年に一度の逢瀬なのにさ。でも晴れたらめちゃくちゃ星がきれいなんだ」

真朝はそのままごろりとコンクリートに仰向けになった。

月はネコの爪みたいに細く、星が明るく瞬いている。天然パノラマを邪魔するものは何もない。まるで宇宙に抱かれているようだ。

潮鳴りがひどく静かだ。

しばらく二人は言葉を交わさなかった。

「なつかしくねえ？」

落ち着いた声で真朝が囁いた。何をさしているのか、すぐに分かった。

「小学三年のときの天体観測、だろ」

「そうそう。いつまで起きていられるか賭けてさ」

「結局、二人して寝ちゃったんだよな」

「あれやっぱり夜凧の方が先に寝てたって」

「うそつけ、真朝だろ」

視線を交わして笑いあう。ゆったりとした時間がねむくなるほど心地よい。

(いつかこの時を懐かしむ日が来たら、俺の隣には誰がいるんだろう)

天球から目を外し、傍らへ落とす。

あまりにも近くに居すぎたと思う。

喪うことを考えられないくらいに。

「なあ、真朝」

空を見ていた瞳が動く。

その目線をとらえて、告げる。

「同じ高校行こう」

暗闇でもたしかに真朝が目を見張ったのが分かった。

「え……？」

「俺は真朝と離れたくない。だから」

つめた息を吐いて、真朝は首を振った。

「無理だよ。夜凧の志望校って私立だろ。俺は特待生にはなれない。いくら親元に戻るからってそんな負担かけられないよ」

「じゃあ真朝が行くところ決めて。俺もそこに行く」

卑怯な言い方だ、と夜凧も分かっている。けれどこのまま生殺し状態を続けられるほど気長ではなかった。

無言のまま真朝はうつろに視線をさまよわせた。言葉を探して迷っているように。

そして、今にも泣きそうに顔をゆがめたあと、反動をつけて起き上がった。

「勉強、教えるか？」

「え？」

「オレが、特待生になれるまで、面倒見れるか？」

一瞬、意味が分からなかった。すぐに喜びが湧き上がってくる。

夜凧は真朝の腕をつかんで、ひたすらうなずいた。

「本当に良いんだな！？」

「おまえ自分から誘ったくせに何だよソレ」

互いに顔を見合わせて。どちらからともなく笑顔になった。

「夜凧が俺のレベルに合わせたら、吉永が黙っちゃいけないからな。まあ逆も説得されるかも知れないけど」

「大丈夫だよ」

はっきりと夜凧は請け負う。

「真朝はやらないだけでやれば出来るから」

こめかみを引っかいて、真朝は空を見上げた。

「いやにあっさり言うな」

「長いつきあいだから」

少しかだけ解釈に困る表現に、真朝は複雑な顔をした。

夜凧は笑いながら、コンクリートに仰向けになった。

六年前の天体観測と同じように。

目を閉じると夜空に吸い込まれて、ふわふわとただよっている気分になる。

「俺、真朝と一緒にいられればそれでいい。五年後も十年後もずっと一緒にいたい」
寝言のように呟く。

真朝が微かに笑う気配がした。

「頑張ろうな」

「ああ」

「あーあ。球技大会で優勝したらオール5にしてくれないかな。それなら楽なのに」

「吉永に交渉してみろ。あいつを落とせたら、アイス百個買ってやる」

「あー、なんか夏休みあけてすぐの個人面談、血を見そう」

「だから大丈夫だって。俺も説得するし。それに努力してくれるんだろう」

「まあ……それなりに」

歯切れの悪い真朝に、夜凧はくすくす笑った。

暗闇に沈黙が落ちる。

けれどなぜか重苦しさを感じなかった。

ゆったりとした時間が流れる。

ふと夜凧は軽口をたたいても平気だったのを思い出した。胸が苦しくならない。

(真朝のおかげかもな)

いつもと違った場所で昔に返ったような雰囲気だったから、安心して言葉が出てきたのかも知れない。

(この調子この調子)

心地よい空気をかみしめながら、夜凧は微笑んだ。

夏休みを目前に控えた月曜日。夜凧は一人で集合住宅の廊下を自室へ向かって歩いていた。いつもなら真朝と一緒に帰るのだが、今日は帰りのLHRで吉永に呼びつけられてしまった。仕方なく先に帰ってもらい、職員室まで行ってきたのだ。

手元のプリントに目を落として、夜凧は思案げに眉根を寄せた。

——と。

「ひどいわあ！」

突然、叫びながら女子が廊下に飛び出てきた。ドアが壁に当たって大きな音を立てる。

夜凧は危うくぶつかりかけて、すれすれのところでさけた。

バタバタと走り去る女子を怪訝な顔つきで見送ると、彼女が出てきたドアを見て、今度はあからさまに表情を変えた。

反動で閉まりかけるドアを右手で受け止めて、夜凧は顔だけ中に入れる。

見慣れた部屋に、あ。やっぱり、と呟いて、上がりこむ。

「まあさー？」

物が散乱しているのはいつも通りで、ベッドの上に真朝がいる。

寝ているのではなく、横になっているだけのようだ。

「どうしたんだよ」

「別に」

ぶっきらぼうな態度に、はあんと勘付く。

「お盛んなことで」

飛び起きざまに、真朝は枕にしていたクッションを投げてよこした。

夜凧はそれを片手で受け止めてベッドへ返し、真朝の傍に行った。

「吉永なんだって」

クッションを抱きかかえたままの真朝が無愛想に聞いてくる。

夜凧は手にしていたプリントを渡した。

「スピーチコンテストだって。中学生の部門」

「へー、夜凧、英語得意だもんな。いいんじゃないの」

「夏休み中にレポート書いてきたら、添削してやるって英語の先生もノリノリ」

「全国大会に優勝したら留学かー。すげえなあ」

「で」

「で？」

「さっきのは何」

「.....」

横を向いて目を泳がせた真朝は、もごもごと口の中で呟いた。

夜凧の促す視線に、不承不承口を開く。

「明日の船で親に会いに行っちゃうからっ、その前に伝えたいことがある、って言われて」

「コクられたんだ」

「か...勘違いすんなよっ！ちゃんと断ったって！」

「はいはい分かったから.....でも珍しい子だな」

夜凧の疑問はもっともだ。

マリアンにいるのは虐待されたこどもしかいない。

性的虐待とまでは言わなくても、絶えず夫が妻を殴るシーンや口汚い夫婦喧嘩を見ていたり、息子は母親に娘は父親にしいたげられた記憶があったりして、異性の存在を畏怖することも多いのだ。

つきあうイコール両親の姿、というのはおおげさではない。

よって男女交際もきわめて少ない。

ああ、と真朝が頷いた。

「だってあいつAbelだから」

耳を疑った。

夜凧は目をしばたき、真朝を見つめて、え？ と問い返す。

「夜凧知らない？ Cain Abel syndromeっての。ひいきが激しい虐待でさ、さっきのは親に愛されてた方なんだって」

「へ……え。よく知ってるね」

「あいつが頼みもしないのにペラペラしゃべってくれた」

忌々しげに吐き捨てた真朝は、夜凧の異変に気付かない。

「なんか？ ずっとちやほやされてたのに？ Cainが死にかけて？ で、発覚してここに入れて超サイアクだとか言ってて？ 親元に戻れるから嬉しいとかなんとか」

真朝はクッションに爪を立てた。

「オレに言わせればあいつの方こそサイアクだよ。兄弟が殺されかけたってのに何も思わないなんてさ」

こっそりと夜凧はワイシャツの胸を握りしめた。

ふるえている手が、カフスをつかんだ。

真朝の言葉がナイフのようにさくさくと突き刺さる。

(やっぱり兄弟だとは言えない——)

真正面からあんな言葉をぶつけられたら、きっと立ち直れない。

「でオレむかついたから、『面食いだからつきあえない』って言ったら……ああなった」

夜凧が目を点にした。

さきほどまでの落ち込みとあいまって、複雑な混乱が生じる。

「真朝、面食いだったんだ……」

呆然と呟くと、真朝ががたりと横倒しになった。

クッションを抱えたまま夜凧を凝視し、ためいきをついた。

「真朝……何その反応」

「マジで夜凧気付いてないの？ もしかしてそれ地？」

「あっなんだよ、そのかわいそうな人にするみたいな態度は」

「いやケンカは売ってないんだけどさ」

じっと見つめてから、真朝は夜凧を洗面台に連れて行った。

鏡を指差して、言う。

「こんなやつを四六時中見てたら、ちょっとかわいいくらいじゃ食指が動かなくなるのも当然だろ」

「は？」

本気で夜凧は聞き返していた。

「お前って本当に自覚ナッシングだなあ」

呆れたように真朝は肩を落とし、あとは自分で考えろ、とリビングに戻ってしまった。

いまいち分からず、夜凧は首をかしげて洗面所をあとにした。

台所では真朝が夕飯の支度を始めていた。

「今日はマーボー春雨だぞ。いいだろ？」

「ああ、うん」

ちらかっている物たちを飛び越えつつ夜凧はベッドまで行き、さっきまで真朝がかかえていたクッションを抱いて、腰をおろした。

てきぱきと動く真朝を見ながら、似てないな、と思った。

真朝は真っ黒な髪で、肌も浅黒い。

夜凧はというもともと茶髪に近く、日に焼けにくい体質だ。

同じ遺伝子から生まれたとは考えにくい。

(だから兄弟だって気付かなかったんだよな)

一人納得して、カフスをいじった。

さっきの真朝の言葉は痛かったけれど。

(俺は親元に戻れて嬉しいなんて感じない)

だから、まだ、あの女子よりは真朝に嫌われていない——と思う。

美味しそうな唐辛子のおいに、夜凧の腹がうずき始めていた。

周りは闇だった。

空間の感覚からは程遠い、真っ暗な闇。

誰もいない。ひとりぼっちだった。

(ここはどこ)

答える者はない。

静寂と漆黒の砦。

「————……」

呼びなれた名前を呟く。

認識よりもはるかに深いところで知っていた。

ここにはもう一人いることを。

「————やん」

不安が風船のように膨らんでいく。

あの人がないことは有り得なかった。

だから余計に焦る。

「——いちゃん」

焦燥と呼応するように勢いが増し、クリアーな音になる。

気付いたら、大声で叫んでいた。

「おにいちゃん」

夢から押し出されるようにして、夜凧は目覚めた。

心臓の鼓動がいつもより速い。

ピピピ、と目覚ましが続いていると認識したのは、もうしばらくあとだった。

夏休みも下旬に入った昼下がり。クーラーの風が吹き続ける夜凧の部屋で、勉強会がくりひろげられていた。

「で、スピーチコンテストの方はどうなんだよ」

「んーぼちぼちって感じ」

夜凧はシャーペンのへりをくわえつつ、英文を読み返す。

レポート用紙とパソコンと電子辞書と英和辞書で占められている机の端っこを使って、真朝は数学の宿題をやっていた。

『写すのは八月三十一日になってから』という夜凧の命令に従っているだけなのだが、ときどきどこから手をつけて良いのかも分からないという問題があったとき、すぐに聞けて便利だ。

だがずっと勉強というのも飽きるもので。

ちらりと壁にかけられた時計を見上げた真朝は、肩に手をおいて首を回しながら立ち上がった。

「ちょっと購買行ってくる。何か欲しいもんあるか？」

「あ。俺も行く」

シャーペンを放り出すと、夜凧も立ち上がった。

「珍しいじゃん」

「行き詰まった。日本の自然がなくなりつつある、ってのは書けたんだけど、だから何をすれば良いのか、が分からない」

「提出は新学期だけ」

「ああ。だけどメ切よりもパソコンの調子がおかしくて不安なんだよな。一応データはフロッピーに入れてあるんだけど」

夜凧はぼやいて、大きく伸びをした。

購買は意外と空いていて、夜凧は目当てのものがある真朝と別れて、フラフラと商品を見て回った。

日用雑貨の品揃えに変化はないが、食料品の棚には、スイカやトマト、プラムといった色鮮やかなものがたくさん並べられていた。

マリアンの中において季節を感じるのは、こういうときでしかない。

コンクリートとガラスに守られた箱庭には飢えも寒さも危険もない。

代わりに味も素っ気もない安全が夜凧たちを囲っていた。

ふと夜凧は目を上げた。購買の一角、人通りが多いところにそれは目立つように置かれていた

。

「アゲハチョウ……」

カゴに入れられて、ひとつだけぽつんと。

惹かれるように夜凧は歩み寄った。

手には取らない。

立ったまま、とても不思議なもののように見下ろす。

死んではいなかった。が、元気もないようでピクリとも動かない。

黒い羽はまるで今朝見た夢の闇のようだった。

脆弱ではかない生き物。

「ポイント五百」

真朝が少し体重をかけるようにして、夜凧の肩をつかんだ。

「折半しねえ？」

ひたりとアゲハチョウに視線を合わせたまま、真朝が言う。

あ。こいつ同じこと考えてる、と夜凧は思った。

だから黙って頷いた。

(——出してあげたい)

青く晴れ上がった空の下、本当なら建物の外へ出ることは禁止されているけれど、これだけは外じゃないと駄目だとふたりして気付いていて。

物置の奥にある鍵の壊れた空気窓から外へ出て、ひさしぶりに生きた土を踏んだ。

カンと晴れた太陽が、容赦ない光を地上に浴びせる。

さえぎるもののない直射日光の下で、夜凧はかごを開けた。

しばらくアゲハチョウは動かなかった。購買にいたときと同じく、疲れたように止まったまま

。

じりじりと照りつける陽射しを受けながら、ふたりは地面に腰を下ろした。

雲が流れ、ときどき暑い風が吹く以外は、時間を感じさせるものは何もなかった。

不意にアゲハチョウがその羽を動かした。

弱々しくも懸命にはばたいて、かごの中から外へ出る。

一連の動きをふたりは無言で見守っていた。
パタパタと揺れながら、黒い蝶は去っていく。

「エゴだよなー」

真朝が呟いた。

黒い軌跡を追いながら、夜凧も頷いた。

「ただの自己満足だよ」

アゲハチョウを逃がしたところで、食べるものも仲間もないここでは死んでいくのは目に見えている。

けれど夜凧はあのまま何日か経ってかごの中で横に倒れたアゲハチョウを見るよりは、こっちの方がずっとマシだと思った。

生ごみとして焼却されるより、自然の一部として還ることができるなら。まだ生まれた意味があるのではないか。

それがたとえ人間のエゴだとしても。

「……帰ろうか」

「ああ」

アゲハチョウが見えなくなってから、ふたりはまた自分たちのかごへ戻っていった。

◆真実

夏休みが終わると、受験生は進路だなんだで忙しくなる。

そんな心をせかすように、夕立も毎日やってくる。夏の終わりを告げているのだ。

ザーザーと激しい雨の音を聞きながら、夜凧はパソコンを立ち上げた。

「あれ」

電源を入れたのに画面が真っ黒いままだ。起動音すらしらない。

十回電源を押して夜凧はあきらめた。

どうやら休みの間ずっと機嫌が悪かったのがついにご臨終したらしい。

「ついてねえ……」

ぼやいて夜凧は前髪をかきあげた。

レポートの提出は明日だ。

データはフロッピーディスクに入っているから良いとして、パソコンがこれではプリントアウトできない。

「……真朝に借りるか」

携帯プリンターを片手に、夜凧は立ち上がった。

ノックもインターホンもなしでドアを開けた夜凧は、真っ暗な部屋に眉をひそめた。

「真朝？ いないのか？」

返事はない。

手探りで照明のスイッチを入れる。

白い光が闇をおしのけ、いつもと変わらない真朝の部屋が広がった。

所狭しと物が散乱しているが、肝心の真朝がいない。

購買はとっくに閉まっているだろうに、どこへ行っているのだろう。

「まあ、いいか」

腰に手を当てて、夜凧はパソコンを捜索し始めた。

雑誌をひとまとめにして、CDは積み上げる。服は次々とベッドの上へ放り投げる。

あらかた掃除し終えて、夜凧は首をかしげた。

「パソコンがない？」

おかしい。普段ならこれくらいやればすぐに出てくるのだが。

まさかと思いつつベッドの下をのぞいた夜凧は、あ、と声をあげた。

一番奥の方にほこりまみれになった物がある。

引きずり出してみると、間違いなくパソコンだった。

電源を入れてみたらちゃんと起動した。壊れているわけではないらしい。

「なにやってんだ、あいつ」

あとで問いただしてやると決めて、フロッピーディスクをスロットに放り込んだ。

ファイルをそのまま印刷するだけなので、プリントアウトは早々に終わり、夜凧は胸をなでおろした。

(勝手に使っちゃったけど、後で謝っておけばいいよな)

電源を落とそうとして、ふと夜凧は画面に変なアイコンを見付けた。

否、おかしくはないのだ。

CD-ROMドライブへのショートカットなのだから。
ただそのアイコンが標準のものではなく、横を向いた女性の図形になっていた。
CD-ROMがスロットに入れっぱなしになっているという証拠だ。

マリアンのシンボルにひどく似ている。

どくん、と。
心臓が跳ねた。

(見てはいけない)

本能が警告した。

(開けてはだめ)

このまま何もなかったようにしなくては。

(パソコンを閉じて、ベッドの下に入れて、この部屋を出て)

頭では分かっている。
けれど体が動かない。

(見てはいけない)

(見てはいけない)

(見てはいけない)

胸の下で湧き起こる、好奇心。
透けて見える、真っ暗な未来。

(開けてはだめ)

(開けてはだめ)

(開けてはだめ)

「—————.....」

画面いっぱいウィンドウが表示される。

一番始めは見たことのある写真。病院のベッドで寝かされていることも。続いてプロフィール
。

実弟・夜凧。

ふるえた吐息がもれる。

笑いがこみ上げてきた。
こぶしが、小刻みにふるえた。

『焼却炉で燃やしてきた』

『過去とか親とか、そういうのなしで、オレは進路を決めたいんだよ』

スロットを開く。
緑色のコーティングをされたCD-ROMがでてくる。
夜凧も見たことがあった。
セレモニーで渡されたものにそっくり。
違うのは金色で書かれた文字が「Mahsa」だということ。

「……………」

ガチャ、とドアの開く音がした。

(真朝だ)

床にパソコンを置いて、ゆっくりと立ち上がる。

「夜凧？ いるのか？」

真朝が部屋に入ってくる。

一步一步を耳でとらえて。

夜凧は顔を上げた。

真っ直ぐ見据えられた真朝は微かに眉を寄せたが、床のパソコンを見つけた途端、息を呑んだ

。

「夜凧……」

「真朝これ何」

「夜凧、聞け。オレは」

「真朝……これは何だって聞いているんだよっ！」

乱暴にCD-ROMを投げつける。

真朝の頬をかすめて、CD-ROMは壁に当たって落ちた。

真朝の顔に、一筋の血が流れた。

「お前、CD-ROMは焼いたって言ったよな。焼却炉で。見たくないって。過去とか関係なしに進路決めたいって」

信じていたのに。

(だれよりも)

たしかに。

(それをどうして)

夜凧の顔が歪む。

真朝はあえぐように唇を動かして、すぐに口を閉じた。

いいわけは、ない。

じりじりと時が過ぎていく。

いたたまれなくなって、夜凧はつめていた息を吐いた。

「勝手にパソコン使って悪かった。じゃ」

レポートとプリンターを抱えて、わざと目を合わせないようにして、夜凧は真朝の横をすり抜けた。その腕を真朝がつかむ。力任せに夜凧は手を振り払った。

「楽しかったかよ！兄弟だって言えない俺を見て！一緒に学校に行きたいなん……て…思
って……」

堰を切ったように感情があふれ出た。喉がつまって声にならない。

真朝が口を開く。だが声はなく、空気だけがうつろにもれた。

夜凧は真朝を睨みつけると、背を向けて部屋を出た。

明かりもつけずに自室に戻るとレポートを机に放り出して、ベッドに倒れこんだ。

(くやしい)

悲しみや怒りや後悔がひとつの思いに収縮される。

胸がきりきりと痛む。

何度もシーツを殴りつける。四回、五回、とくり返すうちに拳は力をなくして転がった。

「どうして……っ……どうして……」

枕に顔を押し付けたまま夜凧はうわごとのように呟いた。

なにをゆるして、なにを認めて、なにを謝ればいいのか分からない。

指が求めるようにカフスへ触れた。じわりとした冷たさに、ためていた息を吐く。

身体がだるい。

(もう何も考えたくない)

ちょうどやってきた眠気に身をゆだね、夜凧は目を閉じた。

次の日、初めて夜凧は真朝の部屋に行かなかった。

早々に登校し、誰もいない教室に座って海を眺めていた。

予鈴ギリギリで大半の生徒が教室に流れ込んでくる。その集団の中に真朝もいた。

(一人で起きれるんじゃないか)

口の中で呟いて、夜凧はまた窓の外に目をやった。

四時間目までお互い口を聞かずに過ごした。

弱々しい視線を感じたが、夜凧は気付かないふりをした。

昼休みのチャイムが鳴り、四十人の生徒が思い思いに動き出す。

「夜凧」

廊下で声をかけられた。振り返らなくても分かる。知り抜いた、声。

聞こえなかったというように歩き続ける夜凧を追い越して、真朝がその前に立った。

「話がある」

答える代わりに睨んでも、真朝はひるまない。

黙って真朝は夜凧に背を向けて歩き出した。

一瞬迷ったがすぐに夜凧はその後を追いかけた。

学校棟の屋上は直射日光にさらされ、コンクリートは目を痛めてしまいそうなくらい白い。夜凧は影になっている壁にもたれかかり、炎天下で銀色の柵によりかかった真朝の背中を眺めた。

真朝のワイシャツの白が、あざやかに脳裏に焼きつく。まぶたを閉じても白い光が見える。

「オレさ、夜凧と兄弟だってこと、ずっと知ってたんだ。あのCD-ROM見る前からずっと」

真朝の声が、うだるような暑さを切り裂いて、夜凧の耳に届く。

(ああだから変わらなかったのか)

熱で鈍った頭で、しずかに納得する。

(CD-ROMを見る前と後の態度が)

演技ではなく、確かに真朝の中では何も変わっていなかったのだ。

「セレモニーの日に言うつもりだった。だけどCD-ROMを見た後の夜凧、すげえつらそう
でさ。ここで兄弟だったな、なんて言ったら傷つけちゃいそうで……咄嗟にウソついていた」

ゆっくりと真朝がふりかえる。

影の中で夜凧はまぶしそうに目を細めた。

「一回ウソつくとき、うしろめたくて、ばれたときが怖くて、その人を拒絶できなくなるんだ
よな。はじめて知ったよ」

(分かるよ)

夜凧にも覚えがある。

(嫌われたくなくて)

少しでも誠実であろうとあがく。

「一緒の高校に行こう、って言われたとき、正直嬉しかった。だけど……本当のことが言えな
かった」

ゆっくりと夜凧は顔を上げた。

けぶる光の中で真朝が笑っていた。

「オレさ、料理人になりたいんだ。レストランのコック。だから夜凧とは同じ学校に行けない」
衝撃はなかった。代わりにひざから下の力が抜けて、夜凧は壁伝いにすんと座り込んでしまった。

(真朝らしい)

なぜ気付かなかったのだろうと思った。少し考えれば分かったはずなのに。

それほどまでに必死だったのか。

途切れそうな関係に不安で、絶対の約束を求めた。

(最低だ)

風がやさしく肌をなでていく。

遠くから昼休み終了のチャイムが聞こえてきた。

雲が、動く。

「覚えてたんだ」

ぽつりと夜凧が呟いた。

「俺、真朝のこときれいに忘れてたのに。お前は覚えてたんだ」

ああ、とうなずいて真朝は夜凧に歩み寄った。

壁の影に入って、夜凧の前でしゃがみこむ。

「正確にはちょっと違って。オレが覚えてたのは、これ」

おもむろに腕を伸ばし、真朝は夜凧のカフスに触れた。

「たくさんたくさん殴られて手当てもなしで放って置かれたときさ、いつも横で泣いている奴がいたんだよ。ごめんねおにいちゃんいたかった、って」

あ、と夜凧は思い出した。

泣き続けるこどもの夢。

あれは記憶の再生だったのか。

「目なんかかすんでよく見えないだろ。だけどこれが光って、お前が傍にいるって教えてくれたんだ。泣きじゃくるお前見てたら、殴られたのがオレでよかった、って、こどものくせに王子みみたいな気分でさ。今思えば夜凧がいたから俺は耐えられたんだよ」

遠い目をして、真朝は切ない笑みを浮かべた。

それが本当ならどんなにいいか。

「それから……なんか大人たちがいっぱい来て、いろんなこと聞いてきて……気付いたらここにいた。周りを見渡してもお前がいないだろう。必死で探しちゃった」

「真朝、記憶力良いな。俺、全然覚えてない」

「ま。お前より十ヶ月とちょっと年上だからな」

笑って真朝が手を引いた。耳朶からぬくもりが去ると、心にぽっかりと穴が開いたようだった。

無性に泣きたくなった。

顔を上げればビー玉のように透き通った青空が広がっている。

熱い空気が流れ、汗がじわりとにじんだ。

この暑さじゃ思考回路がうまく働かない。

だから今なら素直に言えると思った。

ぴたりと視線を合わせて、夜凧は口を開いた。

「俺、真朝が好きだった」

「うん」

「離れたくなんてなかった」

「うん」

「小さいとき真朝だけが殴られてたって知ったのはショックだった」

「うん」

「それを忘れてたのもショックだった」

「うん」

「きっと真朝は俺を嫌うと思った」

「……うん」

「憎まれるんじゃないかって不安だった」

「うん」

「だから兄弟だって言えなかった」

「うん」

「ずっとこのままでいたかった」

「うん」

「卑怯でずるい奴だった」

「……うん」

「ごめん」

「うん」

「本当にごめん」

「……うん。もういいよ」

ふわりと抱きしめられた。

あたたかかった。

空気はこんなに熱いのに、吹き付ける風はこんなに湿っているのに。

どうしようもなくあたたかった。

すがるように抱きついた夜凧の耳に、ふわりとささやきがふってきた。

「俺も夜凧が好きだから」

涙が、にじんだ。

真朝の胸にひたいを押し付けたまま、夜凧は何度も頷いた。

気付いてた。

マリアン（ここ）は最後の場所ではない。

傷付いた羽をいやすために、少しの間だけとどまる場所。

いつかは飛び立たなくてはならない。

あのアゲハチョウのように。

気付いていながら、分からないふりをしていた。

——もう、それも終わりだ。

夜凧は顔を上げた。

真朝の瞳を真っ直ぐに見つめる。

「料理人、頑張れよ」

「お前も特待生狙ってるんだろ」

「居場所が落ち着いたら連絡する。たぶん寮だけだ」

「オレは一人暮らしかな。あそこに戻る気ないから」

「よかった。安心した」

「週に一度は会おうな」

「たまには夜凧の料理も食べさせろよ」

「寮の飯がまずくてオレの味が恋しいって言わせてやるよ」

顔を見合わせて、笑った。

風がその声をさらっていく。

「ずっとともだちでいような」

「あたりまえだろ」

そうしてふたりは立ち上がった。

水平線に浮かぶ積乱雲を見て、もう夏も終わりなのだと、夜凧は思った。

肌の下からにじむように、ひどく生々しく季節を感じる。

きっとこれから幾度も夏を体験する度に思い出すのだろう。

今感じている全てを。

どうしようもなく不器用だった自分を。

「あ」

夜凧が立ち止まる。

先を歩いていた真朝がドアの前でふりかえった。

ポーンと綺麗な弧を描いて、銀色の塊が真朝の手に収まった。

真朝はカフスを不思議そうに見つめて、夜凧に視線を移す。

「それ目印な。真朝が俺を探したみたいに、今度は俺が真朝を探すんだ。どんな人ごみにいたって見付けてやるよ」

ニッと笑って、夜凧は言いきった。

真朝もにやりと笑う。

「楽しみだ」

空は青く、鮮やかに広がっている。

どちらかともなく腕を上げ、お互いの手を打ち鳴らした。

ぱあん、という景気のいい音が、夏の空に響き渡った。

おわり